

A group of children, mostly girls, are standing in a circle on a dirt ground, holding hands. They are wearing bright yellow-green high-visibility safety vests. The child in the center-right has a large black number '3' on their vest. The children are wearing various casual clothing like jeans, patterned pants, and boots. The background is slightly blurred, showing more people and trees.

福島のごともたち とともに世田谷の会

2013年度の報告

活動実施報告

リフレッシュ7回 約500名の親子を受け入れ

2012年

- ・2012年3月 春休み2回 18家族49名
- ・2012年8月 夏休み2回 43家族111名
- ・2012年12月 冬休み1回 18家族58名

2013年

- ・2013年3月 春休み 18家族56名
- ・2013年8月 夏休みA 17家族55名
- ・2013年8月 夏休みB 17家族54名
- ・2013年12月 冬休み 16家族57名
- ・2014年3月 春休み 18家族58人

＜プログラム実施のために＞

・プログラムの実施に先立ち、ボランティア説明会を毎回実施

・プログラム運営、その他の話し合いのための運営委員会実施 現在75回

・各チームで打ち合わせを随時実施

・募金活動: 社会福祉協議会との合同の募金(年1回)

・各回ごとにチラシをつくって募金の呼びかけを行っている

子どもたちも親ものびのびと過ごした



リフレッシュ参加者たちの声

- 福島のことを考えてくれる人がこんなにいるんだ、と実感し嬉しかった。
- この経験が、子供たちの将来の「糧」となり、得られたことは多いと思う。
- 行くまでは初めての土地で、知らない人たちと一緒に行動できるかすごく不安でした。でも、スタッフの方々、ボランティアのお姉さん、お兄さんがすごく優しく、一生けん命楽しく遊んでくれたので、子どもたちもすごく楽しめたし、リフレッシュできました！



区民向け報告会・講演会を開催

- 2013年6月29日 佐々木るり氏 「福島の子どもの現状について」
- 2013年11月9日 坂内智之氏 「福島発、小学校現場からの報告」
- 2014年3月1日 吉野裕之氏 「福島の子どもたちは今、健やかな子ども
の育ちのために」

•2014年5月18日

三春町元副町長の深谷茂氏 「福島県三春町で何が・・・そして今」

並びに世田谷の震災対策について災害対策課長有馬氏による説明
(年度内に実施予定でしたが、予定講師が中間貯蔵施設受け入れの件で予定変更しました)



実現できたこと

1. 福島との繋がりの発展

(1) 伊達市・福島市・郡山市の教育委員会との繋がい

- ・リフレッシュ募集案内を、小学校3年生以下に全校配布。
- ・世田谷区教育委員会が共催してくれている信用力は抜群である。
- ・郡山市9000枚等の印刷にファンド助成は有難い。
- ・学校配布で初めて保養を知って往復ハガキで申し込んで来る

(2) 福島の人、キーマンとの繋がい

- ・福島側で保養に取り組んでいる吉野裕之氏(NPO法人シャローム災害支援センター)とは「弦巻のいえ」を共同運営するまでの関係となった。
- ・伊達市 穴戸元富野小校長と移動教室の可能性などを探っている

(3) 福島参加者との継続的な繋がい

- ・「ふくせたメルマガ」を開設した。各地の保養情報などを随時発信。

2. 世田谷区行政等との繋がりの発展

(1) 区による宿舎提供

(2) 教育委員会による募金チラシの全校配布

(3) 社会福祉協議会による街頭募金(43万円)



3. さまざまな団体との繋がりも広がった

(1) 都内4区保養団体の交流会

を2回実施(10月、4月)

中野アクション子ども保養プロジェクト

福島子ども保養プロジェクト@練馬

福島の子保養プロジェクト 杉並



世田谷

杉並

福島

練馬

中野

(2) その他の保養情報交換に役立っている団体

3.11受入全国協議会、福島の子どもたちとともに・川崎の会、湘南の会、西湘の会

(3) 子ども被災者支援法関連の情報(復興庁・文科省関連) 入手に役立っている団体

原発事故子ども・被災者支援法市民会議、子どもたちを放射能から守る全国ネットワーク、国際環境NGO FoE Japan

(4) 海外からの資金助成

セーブ・ザ・チルドレン ジャパン

4. 学生ボランティアとの繋がりも広がった

ボランティアの募集を大学に
呼びかけ、大幅増加した

青山学院大学、
立教大学、
日本体育大学

IVUSA(国際ボランティア学生協会)

国士館大学キッズライク

法政大学パフォーマンスサークル

中学生も参加



5. 事務所「弦巻のいえ」誕生

- ・空き家を持っており、福島支援に理解が深い方と出会うことができ「弦巻の家」が実現した。
- ・今まで分散していた遊び道具や備品が一か所に置けるようになった。
- ・福島市で活動する「NPO法人シャローム災害支援センター」と共同運営を開始した。



6. 組織も整備 されつつある

大きな仕事も小分けすれば無理なく出来る！

チーム制にして負担を少なく！
やりがいを大きく！

調整・渉外部門	渉外チーム
	総務調整 チーム
	助成金チーム
	メディア対応チーム
リフレッシュ部門	企画検討チーム
	募集・参加者調整チーム
	ボランティア担当チーム
	リフレッシュ実務チーム
広報・記録部門	イベント関連チーム
	記録・文書チーム
	写真管理チーム
	WEB関連チーム
広がり部門	ふくしまの家チーム
	参加家族同士の交流チーム

現在の課題

現在の課題

- 「保養」プログラムへの応募の倍率は毎回、2.5—3倍ある、なるべく多くの子どもたちを受けいれたい。
- 福島県で「保養」プログラムが広く認知されているわけではない。今後、認知度をどう広めるか。
- 活動資金をどう持続的に確保するか。
- 運営委員の拡大： 世田谷区と福島で
- 協力団体、協力者を増やす

「災害対策に関する提言」
を考えるに当たっての
現状認識

1. 放射能災害についての現状認識

(1) 福島の子の苦悩に接して・・・

- ・目に見えない、影響もよくわからない放射能に対しての不安
- ・行政や医療に対する不信感
- ・子どもを被曝させてしまったという後悔が続く
- ・近隣の人たちと、放射能についての不安を話せない苦悩

(2) 翻って、250km圏内事故となったら 私達も同じではないのか

- ・どうやって避難するのか、どうやって被ばくを軽減するのか、
- ・備えが必要ではないか

2. 実際に放射能被災をした自治体の経験から学ぶ

2014年5月18日 講演会(世田谷区共催・ブライトホールにて)

〈福島県三春町 元副町長〉深谷茂氏

- (1) ある日小さな町に国境難民のように2000人の避難者が押し寄せてきた。
- (2) 原発から50kmで何の知識も備えもない町に放射能が襲ってきた。上から情報は来ない。



3. 共助と自主判断で乗り切った

(1) 避難者への対応

学校の体育館に自炊設備を作って食材を渡し、自分たちでやってもらった。町民も手伝った。

(2) 放射能への対応

1) 情報は自分で得る:

避難してきた大熊町職員から知識を得た。線量測定をしていた市民から情報を貰った。

2) 判断は自治体が自分です:

議会・町・自治会と協力して安定ヨウ素剤を配布・服用を決断した。

教訓

- 国や県を頼っても住民は守れない
- 縦割り・上意下達、責任不在でなく、住民を守るために最善策を選ぶ！
- 情報は自分で取り判断する
- これらは日常的に良好なコミュニティが存在し、行政・市民との信頼関係があったからこそ出来た。

世田谷区における防災

<世田谷区・有馬防災課長の講演から>

最初の72時間は情報収集と人命にかかわることに。
区民の助け合いを前提にしなければ計画成り立たない。

「公助(行政支援)」には期待できない

自助・共助が必要。共助が最大の課題

災害対策に関する提言

提言① 市民編

1. 日頃の「地域コミュニティ力」の向上

顔が見え、声をかけあう様々なコミュニティーができていることが肝要。
地域組織や分野別市民団体等が縦横に活動すること。それを後押しする(ファンドもその一つ)ことでコミュニティー力が向上する。

2. ただ待っている被災者になるのではなく、動ける 支援者になるために、仕組みづくりを考える

88万人、学生が多い⇒動ける人がたくさんいる

町会・自治会・市民活動団体がコーディネートして、中高大学生も含めて動ける仕組みづくりが必要。

「せたがや防災NPOアクション」が立ち上がり、当会も参加している

提言②（行政編）

1. 区民を守るために、情報を集め、最善の判断をすること
2. 情報をオープンにする
3. 日常的に区民と顔見知りの関係を作る
4. 放射能事故を想定して88万人避難計画が必要